

インド西部地震・救援委員会

最終更新日2002年4月25日

■第28報(4月22日)

【グジャラート州での暴動について(その後)】

インド西部地震から、現地で活動する様々な団体と連携をとっていますが、その中で、女性自営労働者組合(SEWA)から、以下のようなレポートがありましたので、ご紹介致します。

<戦闘からの再建 1ヶ月後>

SEWAの組合員のある女性は食料行商で、オールドタウンへ食料を行商していた。「私は最近SEWA銀行から冷蔵庫を買うお金を借りた。夏の間冷たい飲み物を売ろうと計画していたのです。見て下さい、私の冷蔵庫、行商カート、私の家に起こったことを。すべてもちやべちゃにされた。私は家と生計のすべてをゼロからやり直さなければならなかった。」

また別の女性は衣料修復者だった。彼女は2人の娘と仲良く貿易者のためのスカートを生じていた。彼女は30台のすべての機械と家を無くした。キャンプに避難をし、彼女は「神のおかげで私たちは生き残ることが出来ました。一生懸命はたらくて生活を立て直します」といった。彼女だけでなく、SEWAの組合員である約40,000人の女性自営業者とその家族がこの暴動によって被害を受けた。このように家や道具を失ってはいない人々もまた困難に当たった。労働者のほとんどの町域が暴動に遭い、20日間以上も外出禁止となっていた。

彼女らはまったく収入のあてがえない。この1ヶ月間これらの自営業者と家族は仕事もなく収入もなくそれゆえ、1日1食さえもむずかしい状況にある。地域に外出禁止令がだされてからは仕事にでることもできない。

それゆえ、収入の見込みがまったくない、キャンプ地に住んでいない会員たちにも助けが必要があるべきだと感じられた。基本的な食糧配給は彼らにも与えられるべきである。そのように彼らは充分生き抜ける。小妻は国連食糧計画が提供した私たちの最初の可能なオプションだった。そして小妻は私たちの会員に緊急援助として彼らに配られた。配分の確実な基準はリーダーとSEWAのオーガナイザーとのあいだで誰に優先的に小妻を配分すべきかということによって決められた。

家が完全に被害を受けたメンバー、外出禁止地区に住む会員と彼らの地域的状況から食糧を得るのにかかる時間がかかると見えないメンバー、家屋が完全に被害を受け、今のところ財力がないメンバーを援助の配分の基準とし、これらの会員は7キログラムの小妻を受け取ることができる。これで6人家族では最大4日間(さまたまかもしれないが)利用することができる。

SEWAの対応

5箇所の災害キャンプ地での作業は継続されている。

(A)子どもケアセンター

約80人から200人の子どもの子どもケアセンターで世話を受けている。5箇所それぞれにひとつある。子どもは自分たちの感情を絵を描くことや歌うことで表現している。SEWAはグジャラート政府の統合された子ども開発計画と共同した。これらの5つのキャンプ地の子どもケアセンターはグジャラート政府によって認められた。子どもへの食糧提供はICDSによって提供されている。

(B)ヘルスケア

SEWAの健康協同組合と健康部門は常時ヘルスケアサービスを行っている。健康部門調整は地元自治体とグジャラート政府ヘルスサービスと共に調整している。移動ヘルスケアによってすべてのキャンプ地を巡回し、また薬も提供する。専門医などの紹介サービスなどの場合、ヘルス協同組合がアレンジする。婦人科、小児科学者、眼科医もまた1週間おきに巡回にまわっている。

(C)衛生と衛生設備

SEWAオーガナイザーのチームはキャンプで毎日の基礎としてキャンプ住民や地元委員会も含んでキャンプ地やキッチンエリアを掃除している。またごみや食糧の残りなどの適切な処理、移動できる一時トイレなどの適切な清掃をガイドする。処理場所に掃り込まれこみに消毒スプレーをかける。

(D)生計の保護

生計の保護作業は継続している。要求される作業はますます多くの女性が参加したいということが増している。最近では1,115名の女性が違った分野(タコ巻き、服飾直し、線香づくり、紙バック作りなど)の経済活動から一般的な仕事や収入を得ている。キャンプ地に25台のミンガがそなえつけられた。生計の財産の被害と生計の再建の必要性の宣定はインド管理機関からの生徒のチームによって伝えられた。SEWAはこの計画をもとに長期ポスト戦闘再建プログラムを準備している。

(E)非公式教育

SEWA Academyの教養チームは若い男女、そして大人にもクラスを実施する。2時間授業は毎日行われる。それぞれ違った年代に違った時間がある。キャンプ地の若い女性、7歳から14歳の年代グループはグジャラート語から学んでいる。幼稚園クラスではアルファベットと数字の紹介から始まっている。3つのキャンプ地で約120人の女の子が読み書きの授業を受けている。

(F)家屋復興

家屋の被害調査と全15,250家屋の再建のための調査の必要はKSADSPからの案内とデータのもとに終わった。復興のためのコストや計画、概略、コスト見積りなどの詳細なレポートは準備されている。SEWAは調査を用いながら家屋の補償/パッケージのデザインのことグジャラート政府ともつなかりを持っている。

田舎の対応

Khadar地区では70の村の約7500メンバーが被害にあった。彼らはAnand町でキャンプ生活を送っている。SEWAの一般的なアプローチに基づいて子どもケアセンターとヘルスケアセンターが7つのすべてのキャンプ地で開かれている。平均563人の子どものセンターに行った。詳細な村の調査は3月4日まで開始されるだろう。Anand町と村々は外出禁止令下にある。それゆえオフィスは閉まったままである。

次へのステップ

家族がキャンプ地へ避難して今ではほく月が経った。彼らの仕事もまた行き詰まっている。生活はすべて妨害された。キャンプ地の外の家族もまた生活に行き詰まっている。日雇い労働者は仕事がなく収入もない。地域は外出禁止令下にあるため基本的に毎日の必要なものが利用できない。子どもの教育もまた問題で、それに加えて、伝染病や病気を誘導する夏の暑さも問題だ。家族は家が破壊されていようと被害を受けようとする彼らの家に帰りがたっている。彼らは仕事を一生懸命に働く気持ちと自分たちの家を再建しようとする気持ちがある。しかしながら、恐れさもある。危険だという感情がある。メンバーはSEWAのサポートを願っている。最初の緩やかなステップは自宅への訪問だ。隣人たちと時間を過ごす。滞在を少しずつ増やしていく。すべてのステップにおいて注意が必要である。同時にSEWAはグジャラート政府とも警備と保護についても交渉するだろう。できるだけはやく家族に再定住の過程の重要な補償をすることで。このような挑戦は困難だがメンバーは信じているしオーガナイザーは自信をもっている。一緒に乗り越えよう。

■募金の振込先■

郵便振替 口座番号 00960-2-12443 加入者名 災害救援委員会 *通信欄に「インド西部地震またはNGO災害救援会」とお書き下さい。 *なお募金総額のうち、15%までを限度として事務局運営費に充当させていただきます。

■第27報(4月22日)

【パタンカ新しべらプロジェクト(PNY)についてのレポート】

インド西部・グジャラート州での地震から活動を続けているNGO・SEEDSからレポートがありましたので、ご紹介致します。また、前回のニュースでもお知らせしたように、グジャラート州で大規模な暴動が発生したため、活動が一時停止せざるを得なかった状況もありましたが、現在活動を再開しているようです。

過程状況と状況査定

■グジャラート州地震安全イニシアティブ(Gujrat Earthquake Safety Initiative)

グジャラート州地震安全イニシアティブ(GujesI)は2月の最初の週で始められ、3都市で会議が開かれた。アーメダバドでアメリカのNGO・GHIとSEEDSのメンバーはアーメダバド州のGSDMA(グジャラート州災害管理局)のMr.ThiruとMr.MF.Dastoorとアーメダバド都市開発機構の議長(AUDA)のMr.Surendra Patelに会った。Barodaで地方自治体委員のMrs.Ramachandranと地域徴税官Mr.Bhagyeshと会い、Suratで地方自治体委員のMr.Guruprasad Mahapatraと会った。今後、グジャラート州政府との連携のもと、GUJESIは進められる。GUJESIは4月20日から再開されるだろう。3都市での提案されたワークショップは2002年の7月の最終週と予定されている。GHIによってリードされたGESI国際チームはデータ収集と公共物資のガイドラインの設定のために働いている。

<GUJESIについて>

グジャラート州地震安全イニシアティブ(GUJESI)は、アメリカのNGO・GHI、SEEDS、UNCRD防災計画兵庫事務所、などがグジャラート州政府と連携し、グジャラート州内にある都市3つをフォーカスして、その地域の特性、人口、建築物の状態、公共施設などを調査し、災害が発生した際にどのようなことが起こりうるのかを分析し、そこから取り組むべき課題を抽出している。それらの結果を広く市民に訴えていく、という計画。

■パタンカ新しべらプロジェクト(Patanka Navjvan Yojana)

<パタンカ村>

- 作業は138家屋が進行中とさらに3つの家が初期建設中であると3月23日に報告された。
- SEEDSのスタッフによるパタンカ村の生計の社会的調査は2002年の2月21日から23日に実施された。そしていくつかのこと、医療設備、衛生設備、ごみ収集設備、排水設備などから貧困の状態という広い表示が現れた。
- コンクリートワークショップ:特別にコンクリートワークショップがパタンカで計画され、そして行動された。ワークショップでは家をつくる要素と同様に石をとおして使われるコンクリートブロックが作られる。これは建設されている建物の耐久性をすばらしく高める。
- 家屋再建活動は5月15日から2ヶ月間この地域の水不足が原因で延期されるだろう。なので5月15日までにともとも貧しい家族にたいしての25の新しい家を含む再建をしなければならぬ。
- パタンカの住民は村の仕事コミュニティ全体でできるように調整したグループを形成した。このグループによってなされた作業の最初は村の残骸を取り除くことと新しい栽培場も含めて村を広範囲にわたってきれいにするることにあるだろう。

<ダッタナ村>

- 草の根計画のための助成として、日本大使館(パタンカ地方の女性のリハビリと安定した生計の確保のため)次の地震に備えて主要学校の復元と、女性センター、コミュニティ会議ホール、再建と同様に共同体の建設を請け負う時間を通じて、4日にアーメダバドに到着する予定でした。しかし、3月1日の朝刊を見ていると、「暴動発生」の文字。これは、今週水曜日、コトラという町で、イスラム教徒による列車爆破事件が発生し、その列車に乗っていたヒンドゥー教徒58人が死亡した、という事件から端を発しているようです。

■シェイクテーブル・テスト

2回のシェイクテーブルテストはRadhanpurで2001年12月16日と2002年1月31日に行われた。シェイクテーブルテストはおおおいに地元で興味を引いた。パタンカ村からすべて家主と建設業者が参加された。

■募金の振込先■

郵便振替 口座番号 00960-2-12443 加入者名 災害救援委員会 *通信欄に「インド西部地震またはNGO災害救援会」とお書き下さい。 *なお募金総額のうち、15%までを限度として事務局運営費に充当させていただきます。

■第26報(3月2日)

【事務局より】

■アーメダバドでの暴動発生

インドでの地震から1年以上が経過しました。私たちが支援している、パタンカ村の状況は、すでに100件以上の再建が進行しており、また、ネパールのスタッフやSEEDSのスタッフなどとの協働がよりよい形で進んでいます。

しかし、今回残念な事が起こってしまいました。それは、グジャラート州のもっとも大きな都市である、アーメダバドを中心にした暴動の発生です。私たちは委員会からの派遣で、3月3日に日本を出発して、4日にアーメダバドに到着する予定でした。しかし、3月1日の朝刊を見ていると、「暴動発生」の文字。これは、今週水曜日、コトラという町で、イスラム教徒による列車爆破事件が発生し、その列車に乗っていたヒンドゥー教徒58人が死亡した、という事件から端を発しているようです。

2月28日から突発的・散発的に暴動がアーメダバドなどで発生し、イスラム教徒が居住する集合住宅に放火したり、襲撃されたり、という事件が相次いで起こり、現時点ですでに100人以上のイスラム教徒が殺されています。

この事件は、アゴドヤという、ヒンドゥーとイスラムの両方の聖地で、両宗教間で、どちらの聖地かとうことで議論されている町があり、そこにヒンドゥー教のお寺の建設が進められていて、そのお手伝いから暴動で来たときに、イスラム教徒に襲撃されたということ。また、この地域(1992年に、ヒンドゥー教徒によって、16世紀に作られていたモスクを破壊されており、この際にもそれらを引き金となって、インド全土での暴動へと発展し、その時も3,000人を超える死者が出た、ということがありました。これは、インド独立後最悪の暴動でもあったこととです。

私がグジャラート州に初めて行ったのは、2001年2月でした。それは、この州の一番西にある、カッチ県を震源とするマグニチュード7.9の地震が発生し、その救援活動を行うための調査として、現地に入ったのですが、私も最初は、少々不安な部分もありました。それは、長く渡るパキスタンとの衝突であり、その州も同様にパキスタンに隣接しているため、危ない状況ではないのか、ということを手勝手に想像しておりました。

しかし、いざ現地に行ってみると、本当にどかな、アジアの田舎町で、道路にはトロバや羊やラクダや牛などが徘徊し、人々も本当に人となつて、笑顔が溢れまわりました。また、パキスタンとの国境付近も、広い砂漠のような、人間の背丈以上の木のような草のような植物が生えているくらいで何もなく、この周辺に住むパキスタン側やインド側の牧畜業を営む人々が住んでいる地域でした。また、これらはパキスタン側から家畜と共に国境を気づかずに越えてしまっ、インドの軍兵に怒られる、というその程度のものでした。

同様に、ヒンドゥー教徒とイスラム教徒も同じ村の中で生活し、お互い共存を志して、むしろそれが当たり前、というようなことがあったり、もちろん被災直後ということもあり、お互い助け合っている、という雰囲気すら感じることができました。

しかし、今回のこの暴動です。

2月28日に、ちょうどパキスタンから戻ってきた在日のアフガニスタンの方から、現地の報告などを聞きました。その話の中で、彼はこのように行っておられました。「アフガニスタンには多くの民族が住んでいる。今はメディアなどでその民族同士の紛争が絶えない、というように報道されているが、それは間違い、確かにそういうところもあるが、本当は、アフガニに住む人々は、ちゃんと共存して暮らしていた。その証拠に私の父(パキスタン人)で、母はタジク人。しかし、ソ連が侵襲してきてから、彼らはアフガニスタンの部族同士で争うようにし向けた。その方がかえって国が混乱し、占領しやすかったから...」

現地で活動するSEEDSのスタッフからメールがあり、「現地は非常に混乱している。しかし、幸いにも私たちのスタッフは無事です。」というメールも届いています。また、現在被災地に入っているUNCRDのスタッフの方の話によると、震源地に近い、カッチ県は今の段階では落ち着いている、とのこと。今回のインド訪問は残念ながら延期になりそうです。こんな時だからこそ、余計に、あの被災地で出会った人たちのことが気になります。あの人たちが、地震で被害にあった上に、さらにこれ以上苦しむ思いをさせないことをただただ遠くから祈ります。

現地のくわしい情報が入り次第、また御報告致します。

■募金の振込先■

郵便振替 口座番号 00960-2-12443 加入者名 災害救援委員会 *通信欄に「インド西部地震またはNGO災害救援会」とお書き下さい。 *なお募金総額のうち、15%までを限度として事務局運営費に充当させていただきます。

■第4次派遣団活動報告書

下記の報告会で発表された第4次派遣団の活動報告書を掲載しました。こちらをご覧ください。

■第4次派遣団帰国報告会のお知らせ

■報告者 常廣百合子さん(国際連合地域開発センター・UNCRD) 鈴木隆太(インド西部地震・救援委員会事務局)	■日時 :2002年1月26日 午後7:00~9:00
■場 :神戸YMCA 4F (神戸市中央区加藤町2丁目-7)	■参加費 :無料

詳しくはこちらをご覧ください。

■第25報(12月28日)

■インドより帰国

12月5日より、インド西部地震・救援委員会からの派遣として2週間に渡り現地を視察してきた被災地NGO協働センターの鈴木隆太が帰国しました。現地の状況をご報告致します。

視察レポート ～その1～

<パタンカ村の再建状況>

前回6月の現地訪問をして依頼の訪問になりましたが、今回、パタンカ村を訪問して、非常に驚きました。以前は多くの家が倒壊したままで、その近くにテントを建てたり、もしくは倒壊した家に布などをかぶせて、生活をされている状況でしたが、今回は多くの家が再建ははじまっており、村の雰囲気も非常に活気のあるものになりました。この村では多くの人が家の再建に携わっており、またその家族の子どももかまを運んだり、女性がセメントをこねたり、という家族総出で行われており、まさに被災者が主役となった復興への道のりを歩んでいる、という状況を目の当たりにすることができました。その理由の一つとして、ネパールから、右工の訓練などを行っているNGO「NSET」から派遣されたネパールの石工2名が現地の人々と交流をしながら再建を手伝っている、という理由です。ネパールの草の根で活動している人々々が、インドの草の根での交流をしながら再建している、ということが大きな要因の一つではないでしょうか。また、同時に私たちのファウンダーであるSEEDSの若いスタッフが現地に毎日通いながら、状況をレポートしたり、エンジニアと密な連携をしながらの再建を支援している、ということも大事な要素である、ということが伺えました。

<ワークショップの開催>

今回の訪問では、救援委員会だけでなく、ネパールからNSETのスタッフ、SEEDSのデリー事務所のスタッフ、日本からEdM、UNCRDのスタッフが参加して、という賑やかなものになりました。EdM、UNCRDの訪問は再建と同時の救援委員会との協働で、今回パタンカ村から30km離れた「ラダプル」いうところで「Shake Table Test」を開催するためです。このワークショップは、一つは耐震性のある家、もう一つは耐震性のない、地盤から30cm離れたら建てられている手法で建てた家を作り、その2つを同時に揺らかして、どう壊れ方が違うのか、というのを実際に見てもらう、というものです。それを見るところによって、耐震性の重要性を改めて認識してもらった、というものでした。参加者はこの被災地で再建活動を支援しているNGOやエンジニア、村の住民など併せて500人が参加され、非常に盛況のうちに終わることができました。また、これとは別に私たちの村で住民の人々を対象にしたワークショップをNSETのメンバーを中心に関催されました。内容は、日本でもあつたような「伝言ゲーム」をして、最初に伝えた言葉が多くの人に伝わって行くに連れて言葉自体が変わっていく、ということや、黒板にOを書いて、黒板に書いたOは、人によって(は)に見えたり、太陽に見えたり、さび(さ)に見えたり、さらば(さ)に見えたり、ということや、見方が違うということを伝えたり、さらに肘を曲げずに一人でクッキーを食べることはできないけれど、2人で協力すれば、お互いがクッキーを食べることができる、ということなどを通して、「コミュニケーションの重要性」「協力しあうことの大切さ」などを認識してもらったものでした。ここで参加者1500人くらいいたが、このワークショップを見させてもらい、当たり前のことなんだけど、忘れがちなことでもあり、でもやっぱり大切なことは国が違っても同じなんだ、ということを感じることができました。(つづく)

*このレポートは、シリーズとして、次回にもにも報告させていただきます。

■事務局より

<報告会開催>

今回のインド視察の報告会をちょうどインドの地震から1年になる、2002年1月26日に、神戸で開催したいと思います。時間、場所についてはまた追って連絡させていただきますので、ぜひご参加ください。

<クラフト販売>

今回の被災地であるグジャラート州で作られているクラフトを、日本で販売することによって、少しでもインドの長期的な支援を考えていきたい、ということで被災地NGO協働センターとしてクラフトの販売を行っていきます。商品は主に壁掛けポスター、ホールダー、ジョルダナバッグの3点です。是非、このクラフトを通してインド・グジャラート州を感じてもらい、インドの被災地を支援してもらえればと思います。

<スタディーツアーの開催>

このインドの被災地を実際に目で見てもらって、肌で感じてもらう企画として「グジャラート・スタディーツアー」を企画しております。ツアーの日程は3月の13日(祝)頃から10日～2週間という期間を考えておりますので、興味のある方は是非事務局まで一報ください。

*クラフト、ツアーにつきましては、改めてチラシ等でお知らせさせていただきますので、皆さま是非ご協力下さい!! よろしくお願致します!!

■募金の振込先■

郵便振替 口座番号 00960-2-12443 加入者名 災害救援委員会 *通信欄に「インド西部地震またはNGO災害救援会」とお書き下さい。 *なお募金総額のうち、15%までを限度として事務局運営費に充当させていただきます。
